

第5章

小・中学生の「放課後の過ごし方」と「1年間の過ごし方」は居住地でどう異なるか

西島 央(首都大学東京准教授)

【要旨】

小・中学生の学校に関わる時間と放課後の過ごし方について、人口規模の大きい地域に比べて小さい地域では、学校にいる時間や通学時間が長く、学校以外の学習の場が限られ、放課後の活動の場を部活動に依存しているなど、小・中学生の毎日の生活が学校中心に構成されている傾向にある。

小・中学生の1年間の体験活動について、「美術館や博物館に行く」などのイベント体験活動と「家族で旅行に行く」などの家族体験活動は、人口規模の大きい地域のほうが小さい地域より多く行っている一方、「地域の行事に参加する」などの地域体験活動は人口規模の小さい地域のほうが大きい地域より多く行っている。

第1節 はじめに～居住地の違いへの注目

2年ほど前に、北関東の山あいの、1学年1～2クラスで全校生徒150人ほどの中学校を訪問したことがある。自治体唯一の中学校なので、学区が広く、公共交通機関のバスを使ったり、家族に自家用車で近くまで送ってもらったりして学校に通っている生徒が少なからずいた。当然、放課後にいったん家に帰ってから友だちと遊ぶということはしにくい。だからほとんどの生徒が部活動に入っていて、一定の時刻までは学校ですごしている。休みの日は、部活動がなければ、たまには友だちと誘い合って、1時間ほどバスに乗って街中の複合商業施設に遊びに行くこともあるという。

このような放課後や休日の過ごし方は、どうも都市部の中学生とは違っているようだ。これは、自由に使える時間の過ごし方が地域によって違っているというだけのことだろうか。それとも、ここ数年、教育に関するさま

ざまな「格差」が取り沙汰されているが、放課後や休日に積み重ねるさまざまな体験活動の違いもまた、将来的に何らかの意味をもつようになっていく…つまり「地域格差」があるのだろうか。

今の段階で、「地域による体験活動の違いがこのような差異の原因になる」ということを明らかにすることはできないが、「地域によってこのような体験活動の違いがある」ということを明らかにしておくことはできる。そこで本章では、人口規模を指標とした居住地によって小・中学生の「放課後の過ごし方」と「1年間の過ごし方」がどう違っているかを記述し、若干の考察を加えて、今後への示唆を導き出していくことにしたい¹⁾。なお、人口規模については、調査対象者の居住地の自治体を「特別区・政令指定都市」「15万人以上」「5～15万人未満」「5万人未満」の4つに分類した。

第2節 学校にいる時間と通学時間

小・中学生が放課後に自由に使える時間とは、睡眠や食事などの生活に関わる時間と、学校にいる時間、通学時間を除いた時間ということになる。生活に関わる時間が地域によって違うということはなさそうだが、前述の例のように通学時間は地域によって違いそうだ。

1) 学校にいる時間

そこで、「24時間調査」から授業など「学校」ですごす時間²⁾(以下、学校にいる時間)と、「アンケート調査」から通学時間についてみてみよう。

学校にいる時間を、図1のように学年ごとに分けて人口規模別にみると、例えば小5生では「特別区・政令指定都市」で438分なのに対して「5万人未満」では462分、中3生では「特別区・政令指定都市」で413分なのに対して「5万人未満」では470分と、学校にいる時間は居住地域によって異なり、人口規模が小さい地域ほど20～50分ほど長い傾向にある。手元にいくつかある中学校の学校要覧の日課表をみると、東京23区のとある中学校では8時20分から15時45

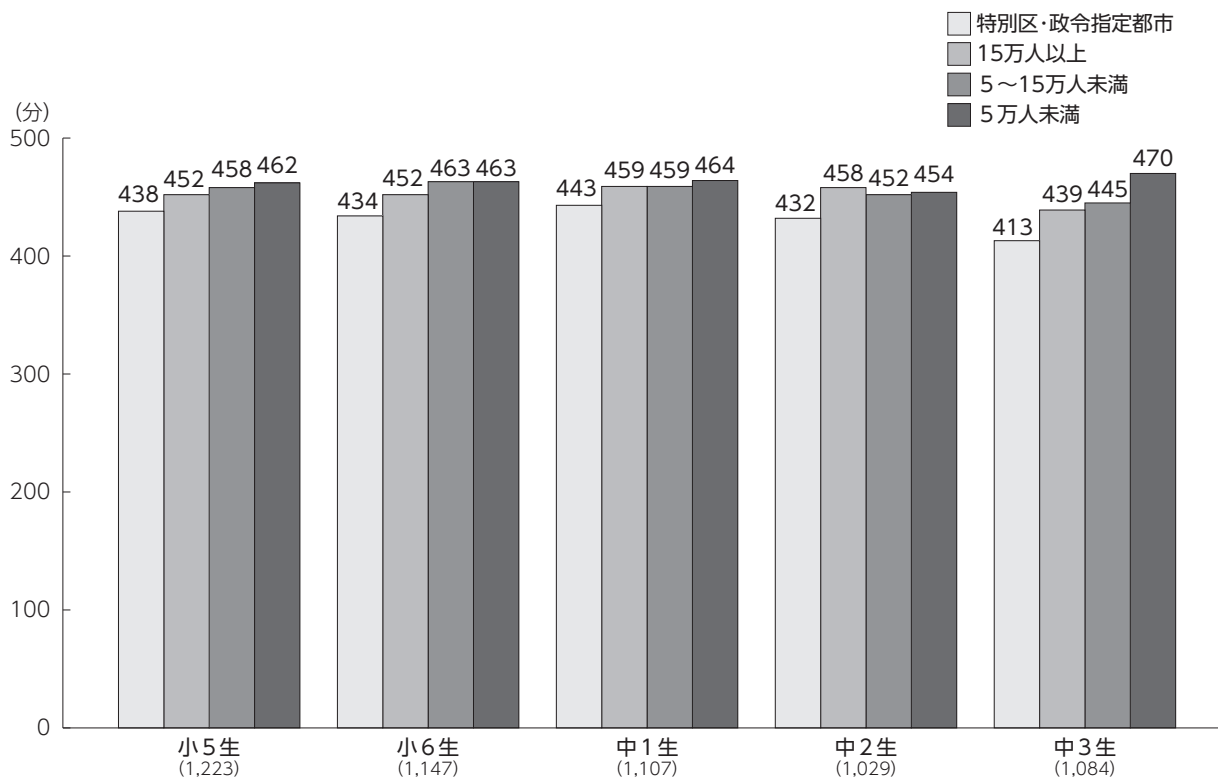
分までなのに対して、九州の離島の小規模校では8時15分から16時45分までだった。授業時間以外の昼休みや諸活動をする時間の設定に違いがあるようだ。

2) 通学時間

続いて表1から通学時間についてみてみよう。小学生の片道の平均通学時間は17.5分だが、ずいぶん散らばりが大きい。「10分以下」と「30分以上」の割合を人口規模別にみると、「特別区・政令指定都市」では「10分以下」が51.2%で「30分以上」は15.5%なのに対して、「5万人未満」では「10分以下」が30.7%で「30分以上」が37.1%と、人口規模の小さい地域ほど通学時間が長い。一方、中学生の片道の平均通学時間は20.7分で、小学生と大きくは変わらない。また、人口規模別の「10分以下」と「30分以上」の割合を比べてみると、数ポイント差にとどまっている。

中学生の通学時間に居住地域差がみられない理由としては、通学手段を考える必要がある。冒頭の例のように、小学校に比べて中学校はより学区が広く学校数も少ない

図1 人口規模別にみた学校にいる時間



注1 数値は全体平均時間。
注2 ()内はサンプル数。

ため、公共交通機関やスクールバスなどを使う生徒がいて、人口の小さい地域の通学時間の長さが抑えられていることや、大都市部では私立中学校に電車などで時間をかけて通う生徒がいて、「特別区・政令指定都市」の通学時間が長くなっていることが考えられる。

以上のことから、少なくとも小学生にとっては、人口規模が小さい地域ほど、学校にいる時間が長く、学区が広く通学時間も長いことから、i. 放課後に使える時間が短くなること、ii. 友だちが近くに住んでいないこと、iii. 何らかの体験活動をする機会が少ないこと、などの地域差がある可能性がうかがえる。

3) 男子小学生の外遊び

そこで、小学生の外遊びをする時間に居住地域による違いがあるかどうか確かめてみよう。外遊びをしない割

合は男子=22.2%、女子=36.4%と性別で違うので、男子を例に表2にまとめた。一般に都市部の子どもほど外で遊んでいないイメージがあるが、実際には、「しない」割合には人口規模による違いはみられず、「2時間以上」の割合は「特別区・政令指定都市」の25.6%に対して「15万人以上」「5～15万人未満」「5万人未満」ではいずれも15%内外と、「特別区・政令指定都市」の子どもの方が他の人口規模の地域の子よりも長い時間、外で遊んでいる。放課後に使える時間の違いと、友だちが自分の家の近くにどれだけ住んでいるかということが影響していると考えられる。

やはり、小・中学生にとって、放課後どこかに出かけて何かをするという機会と時間に、居住地域による違いがあると考えられそうだ。

表1 人口規模別にみた通学時間

		特別区・政令指定都市	15万人以上	5～15万人未満	5万人未満
小学生 (2,349)	10分以下	51.2	35.5	29.2	30.7
	15分程度	33.3	37.1	35.5	32.2
	30分以上	15.5	27.4	35.3	37.1
中学生 (3,193)	10分以下	28.6	27.0	28.6	31.0
	15分程度	34.5	36.5	42.1	36.4
	30分以上	36.9	36.5	29.3	32.6

注1 「10分以下」は「5分」+「10分」、「30分以上」は「30分」+「1時間」+「2時間」+「3時間」+「4時間」+「4時間より多い」の%。

注2 通学を「しない」と回答した人および無回答・不明は分析から除外した。

注3 ()内はサンプル数。

表2 人口規模別にみた男子小学生の外遊び時間

	特別区・政令指定都市	15万人以上	5～15万人未満	5万人未満
しない	23.0	22.6	21.8	22.6
30分以下	24.3	35.2	39.4	35.5
1時間程度	27.2	26.7	22.1	28.4
2時間以上	25.6	15.5	16.6	13.5

注1 「30分以下」は「5分」+「10分」+「15分」、「2時間以上」は「2時間」+「3時間」+「4時間」+「4時間より多い」の%。

注2 無回答・不明は分析から除外した。

注3 サンプル数は男子小学生1,090名。

第3節 毎日の放課後の過ごし方～学習の仕方とその時間

小・中学生は、放課後になったからといって、すべての時間を自分の好きなことに使えるわけではなく、勉強もしなければいけない。では、どんな学習の仕方にどのくらいの時間をかけているのだろうか。またそこに居住地域による違いはあるのだろうか。

1) 学習塾

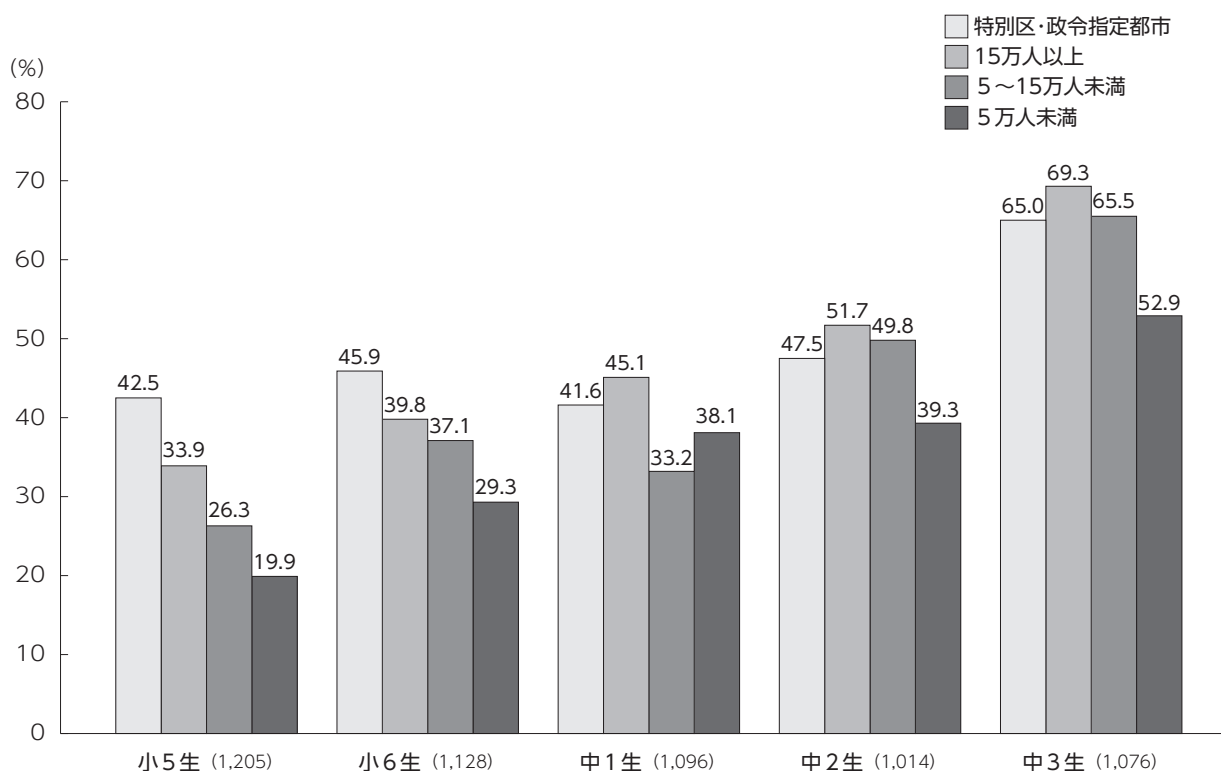
教育格差の議論の際にしばしば指摘されるのが、学習塾で学習する機会に家庭環境による差があるということだ。では、地域による差はあるのだろうか。通塾率を、図2のように学年ごとに分けて人口規模別にみると、例えば小5生では「特別区・政令指定都市」の42.5%に対して「5万人未満」は19.9%と、小学生では、人口規模の大きい地域ほど高く、小さい地域ほど低い傾向がはっきりみてとれる。中学生になると、中1生でははっきりした違いはみられないものの、中2生以降では、「5万人未満」の小規模地域の通塾率が他の地域よりも10ポイントほど低い。民間経営の学習塾が成り立つに

は、一定の人口規模を要することがわかる。つまり、学習塾で学習する機会には居住地域による差があると言える。

2) 家庭学習時間（宿題）

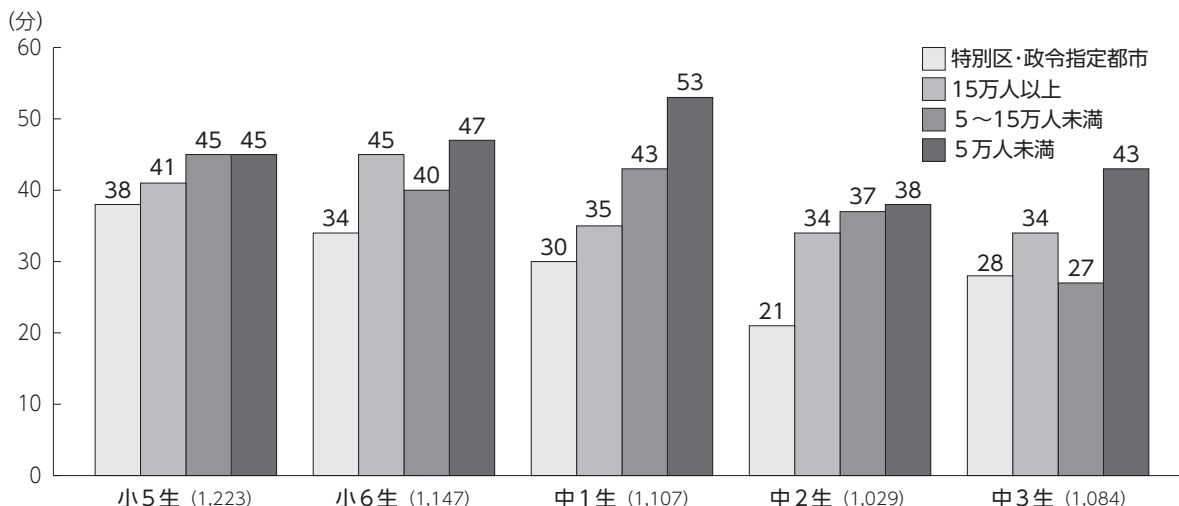
では、人口規模の小さい地域の小・中学生は、どのような学習の仕方をしているのだろうか。図3は、学校から出される宿題をする時間（以下、宿題）を学年ごとに分けて人口規模別に示したものだ。小学生では、「特別区・政令指定都市」の30分台に対して「5万人未満」は40分台と、人口規模の小さい地域の方がやや長い傾向がみられる。中学生になると、1年生で「特別区・政令指定都市」の30分に対して「5万人未満」は53分と、人口規模の大きい地域に比べて小さい地域の方が長い傾向がはっきりみられるようになり、2年生以降でもおおよそその傾向はみられる。放課後の学校外での学習機会の有無が、宿題の量に影響していると考えられよう。

図2 人口規模別にみた通塾率



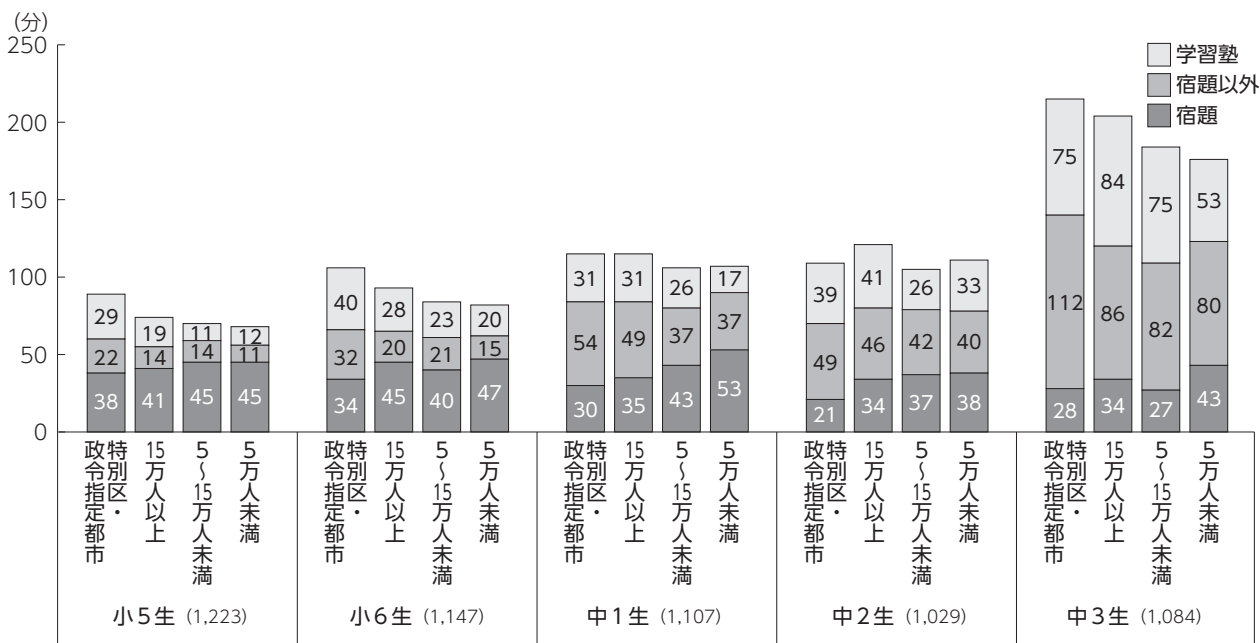
注1 学習塾に「行っている」の%。
 注2 無回答・不明は分析から除外した。
 注3 ()内はサンプル数。

図3 人口規模別にみた家庭学習時間 (宿題)



注1 数値は全体平均時間。
 注2 無回答・不明は分析から除外した。
 注3 ()内はサンプル数。

図4 人口規模別にみた放課後の学習時間の構成



注1 数値は全体平均時間。
 注2 無回答・不明は分析から除外した。
 注3 ()内はサンプル数。

3) 放課後の学習の仕方

そこで、放課後の学習がどのような学習の仕方と時間配分で構成されているかをみてみよう。学習塾と宿題に加えて、宿題以外の家庭学習時間（以下、宿題以外）の3つの学習の仕方のそれぞれ一日平均の時間を積み上げたのが、図4だ。この図からは次のようなことが読み取れる。i. 学年が上がるにつれて、総学習時間が長くなる。ii. 人口規模の大きい地域ほど、総学習時間が長い

傾向にある3)。その内訳をていねいにみていくと、
 iii. 学年が上がるにつれて、学習塾の時間が長くなる。
 iv. 人口規模の大きい地域ほど、学習塾の構成比が大きい。
 v. 人口規模の小さい地域ほど、宿題と宿題以外の家庭学習の構成比が大きいことがわかる。このことから、小・中学生の放課後の学習の仕方には、居住地域によって違いがあると言えよう。

第4節 毎日の放課後の過ごし方～「かけもちパターン」

小・中学生は、毎日の放課後に、勉強以外に主にどんなことをして過ごしているのだろうか。そこに居住地域による違いはみられるのだろうか。一つひとつの体験活動の違いを捉えることは難しいが、習い事や先に確認した学習塾に行ったり、中学生が部活動に参加したりする様子を捉えることならできる。そのような体験活動をあれもこれもする子どももいれば、どれか1つだけをしたり、何もしなかったりと、かけもちのパターンは多様にある。その「かけもちパターン」に居住地域による違いがあるかどうかをみていこう。

1) 習い事と部活動

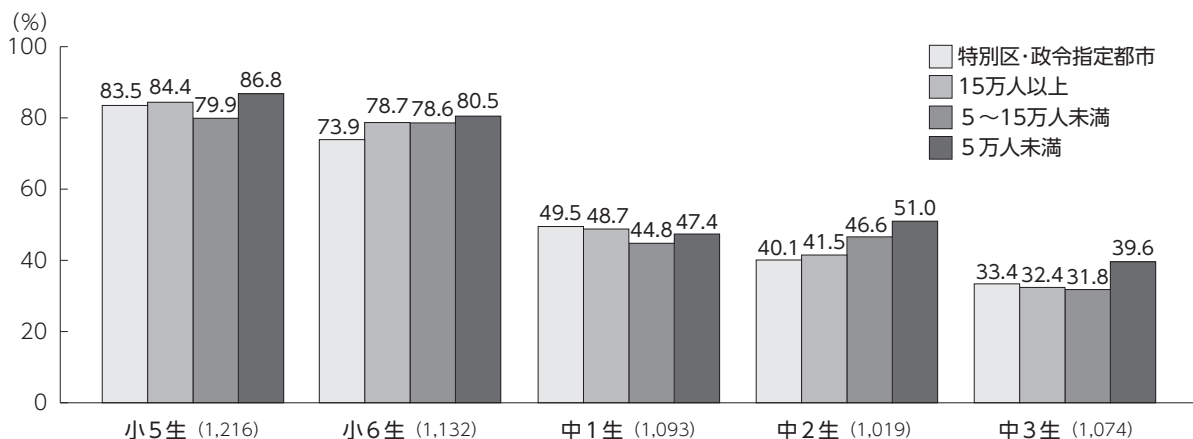
まず、図5から、習い事や学校外のクラブ（以下、習い事）に行っている割合を確認してみよう。小学生では8割前後が、中学生では、中1・2生が4割台、中3生

でも3割台が行っている。中2生と中3生で、人口規模の小さい地域の方が行っている割合がやや高いものの、全体に目立った地域差はみられない。

続いて、図6から、中学生が部活動に入っている割合を確認してみよう。中1・2生は人口規模を問わず、9割前後が入っていて、人口規模の小さい地域の方がわずかに高いものの、はっきりした差がみられるわけではない。中3生については、調査実施時期が11月だったので、大半が引退していて、加入率は2割台にとどまっている。なお、「特別区・政令指定都市」について公立中3生だけをみると、26.4%だった。

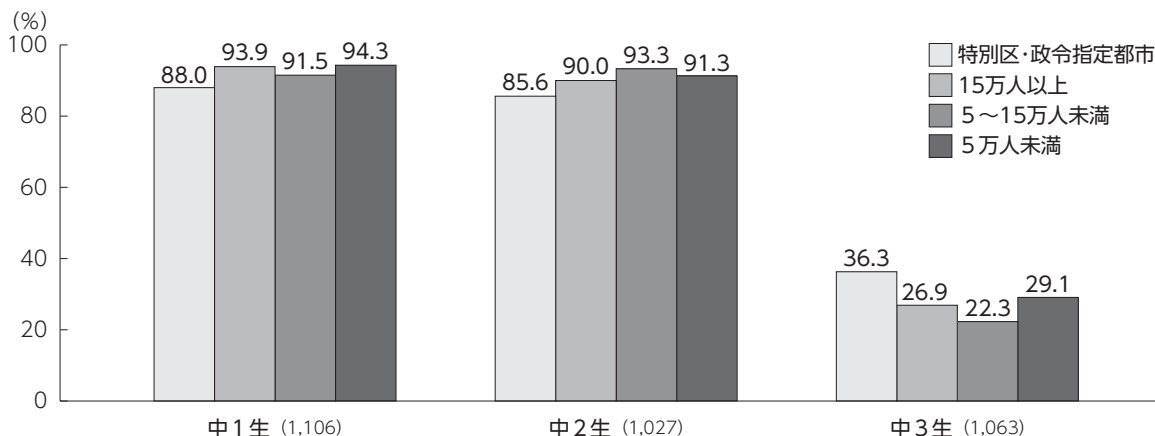
以上から、小学生にとっては習い事が、中学生にとっては部活動が、スポーツや芸術などの文化的な体験活動をする主な場となっていることがわかる。

図5 人口規模別にみた習い事の実施率



注1 習い事や学校外のクラブに「行っている」の%。
 注2 無回答・不明は分析から除外した。
 注3 ()内はサンプル数。

図6 人口規模別にみた中学生の部活動加入率



注1 部活動に「入っている」の%。
 注2 無回答・不明は分析から除外した。
 注3 ()内はサンプル数。

2) 小学生の「かけもちパターン」

では、これらの放課後の体験活動の「かけもちパターン」をみていくことにしよう。

まず小学生について、習い事と学習塾の「かけもちパターン」は、図7のように、全体では習い事のみをしている「習い事○学習塾×」(51.2%)がもっとも多い。習い事をして学習塾にも行っている「習い事○学習塾○」は29.4%で、どちらもしていない「習い事×学習塾×」は13.3%だった。

人口規模別にていねいにみてみよう。「習い事○学習塾○」は、「特別区・政令指定都市」の35.3%に対して「5万人未満」では20.4%にとどまり、反対に「習い事○学習塾×」では「特別区・政令指定都市」は43.2%だが「5万人未満」では63.6%にも上っている。また、「習い事×学習塾×」については、「5～15万人未満」の地域で16.8%と他の地域より少し多い。

小学生の「かけもちパターン」は、学習塾に行っているかどうかで違いがみられ、人口規模の大きい地域ほど「かけもちパターン」の豊富な小学生の割合が高く、人口規模の小さい地域ほど「かけもちパターン」の少ない小学生の割合が高いことがわかった。

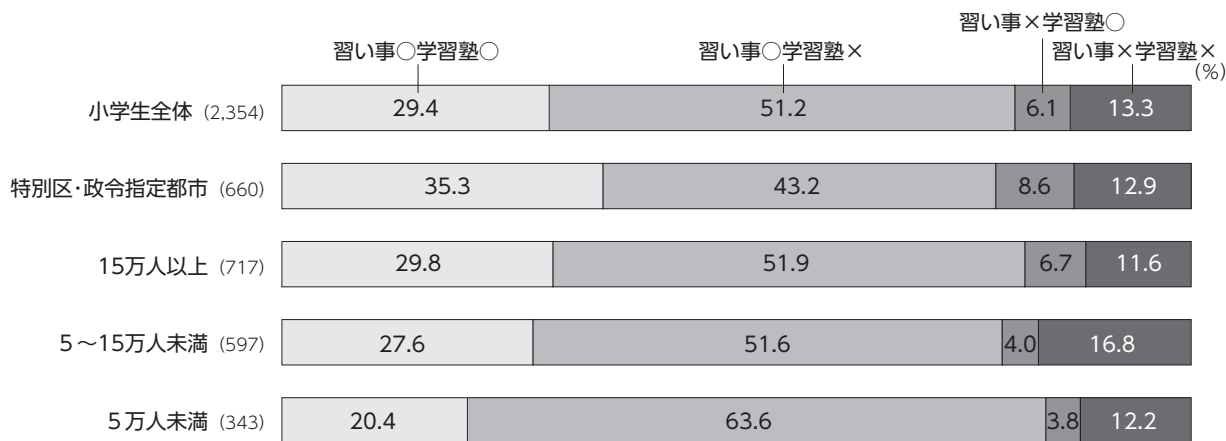
3) 中学生の「かけもちパターン」

続いて、中学生の習い事、学習塾、部活動の「かけもちパターン」をみてみよう。先に確認した通り、多くの中3生が部活動をすでに引退しているのも、中1・2生と中3生に分けて検討する。

中1・2生は、9割程度が部活動に入っていることもあり、図8のように、全体では部活動だけをしている「習い事×学習塾×部活動○」(29.7%)がもっとも高い。すべてしている「習い事○学習塾○部活動○」は19.8%で、すべてしていない「習い事×学習塾×部活動×」は2.6%にすぎない。そしてもっとも低かったのは「習い事×学習塾○部活動×」の1.1%だった。

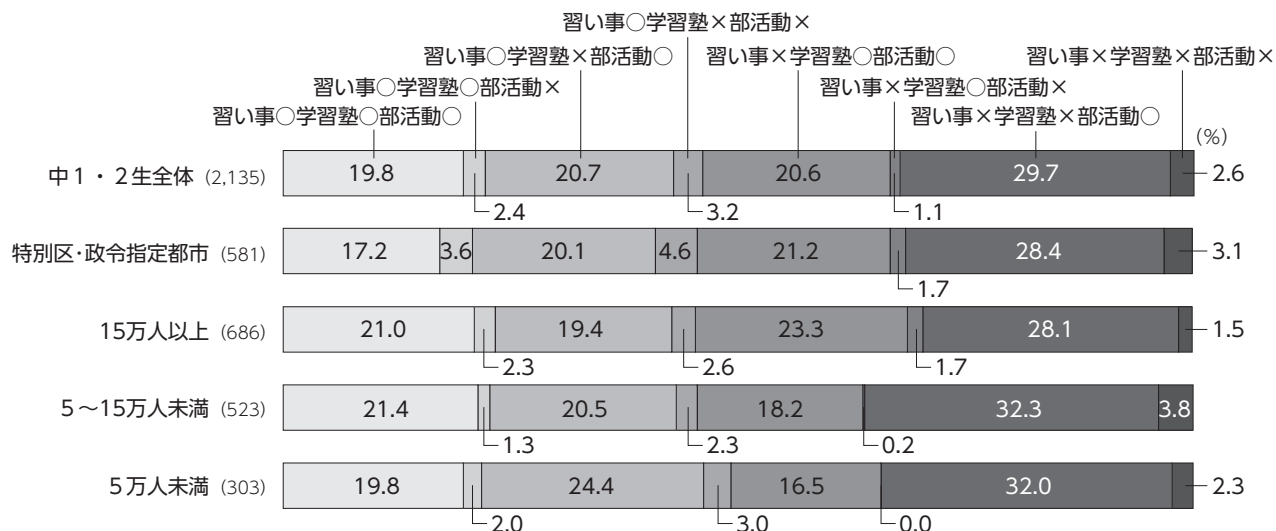
人口規模別にていねいにみてみよう。特徴がみられるのは、第一に「習い事×学習塾○部活動○」が「特別区・政令指定都市」と「15万人以上」で20%台前半なのに対して「5～15万人未満」と「5万人未満」では10%台後半と、人口規模の大きい地域の方が高いこと。第二に、「習い事×学習塾×部活動○」では反対に、「特別区・政令指定都市」と「15万人以上」で20%台後半なのに対して「5～15万人未満」と「5万人未満」では30%台前半と、人口規模の小さい地域の方が高いことだ。

図7 人口規模別にみた放課後の過ごし方の「かけもちパターン」(小学生)



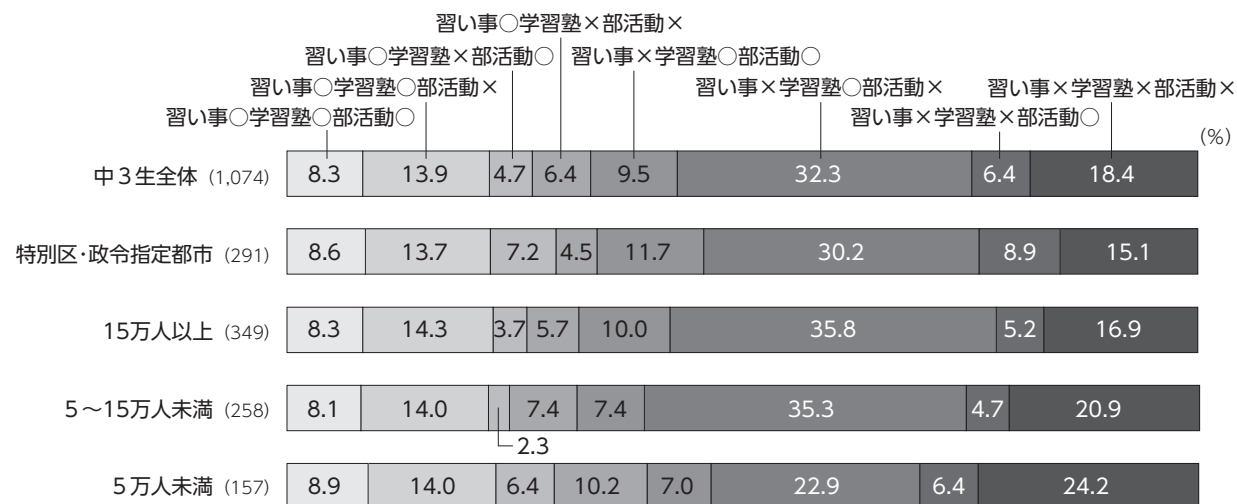
注1 習い事、学習塾のいずれかの設問に無回答・不明の場合は、分析から除外した。
 注2 ()内はサンプル数。

図8 人口規模別にみた放課後の過ごし方の「かけもちパターン」(中1・2生)



注1 習い事、学習塾、部活動のいずれかの設問に無回答・不明の場合は、分析から除外した。
 注2 ()内はサンプル数。

図9 人口規模別にみた放課後の過ごし方の「かけもちパターン」(中3生)



注1 習い事、学習塾、部活動のいずれかの設問に無回答・不明の場合は、分析から除外した。
 注2 ()内はサンプル数。

中3生は、図9のように、多くが部活動をすでに引退していることもあって、中1・2生とは違う様相を示している。つまり、中1・2生で一番高かった「習い事×学習塾×部活動○」は6.4%にまで減少している一方、すべてしていない「習い事×学習塾×部活動×」は18.4%に、もっとも低かった「習い事×学習塾○部活動×」は32.3%に大幅に増加している。

人口規模別にていねいにみてみよう。特徴がみられるのは、第一に「習い事×学習塾○部活動×」は「15万人以上」と「5～15万人未満」で約35%と高く、次いで「特別区・政令指定都市」の30.2%、一番低いのが「5万人未満」の22.9%となっていること。第二に「習い事×学習塾×部活動×」は「5万人未満」

(24.2%) がもっとも高く、人口規模が大きくなるにつれて減っていき、「特別区・政令指定都市」(15.1%) がもっとも低いことだ。

人口規模の大きい地域の中3生は、部活動を引退すると、学習塾に通うようになる傾向があるが、人口規模の小さい地域の中3生は、近隣に学習塾がない場合もあって、何もしなくなってしまう傾向にある。また、「特別区・政令指定都市」では、「習い事×学習塾×部活動○」が8.9%と他の人口規模の地域より高いことからわかるように、私立中高一貫校に通っているなどで、部活動を継続していたり、高校受験のための勉強がないので塾に通っていなかったりする中学生がいることがみてとれる。

以上から読み取れることは、以下の四点だ。第一に、中1・2生と中3生では同じ中学生でも放課後の過ごし方が大きく違っていること。第二に、同じ中3生でも、高校受験を控えているかどうかで放課後の過ごし方がや違っていていること。第三に、「かけもちのパターン」と

して、習い事や学習塾に行っているかどうかによって居住地域の違いがみられること。第四に、習い事や学習塾に行っていない中学生にとって、部活動が、居住地域を問わず、何らかの体験活動をする機会を提供しているということだ。

第5節 1年間の過ごし方～「1年間行事数」

小・中学生は、毎日の放課後の時間も自由に使い、そこでさまざまな体験活動を積み重ねることができるが、冒頭の例のように、休みの日などの余暇時間にどこかに出かけてさまざまな体験活動を積み重ねることもあるだろう。具体的には、長期休暇や週末などに、旅行に行ったり、映画を観に行ったり、家族で季節の行事をしたりすることがあるが、それらも、あれこれする子どももいれば、あまりしない子どももいて、体験活動の量や種類の多寡はさまざまありうる。小・中学生が1年間の余暇時間の過ごし方として、どのような体験活動をどのくらいしているのか、その「1年間行事数」には居住地域による違いがあるのかどうかをみていこう。

1) 項目別にみた1年間の体験活動

長期休暇や週末などに体験する活動について、イベント体験活動・家族体験活動・地域体験活動としてくくれ

る12項目を挙げて、学校で行うものは除いて1年間に何回くらい体験しているかをたずねた。項目ごとの結果を小学生と中1・2生、中3生に分けて表3にまとめた。また、表4にそれぞれの項目の特徴を箇条書きでまとめた。

全体の傾向として、体験頻度がもっとも高いのが「家で季節の行事をする(クリスマス、節分など)」で、小学生では66.5%、中1・2生で59.9%、中3生でも53.8%が、1年間に3回以上体験している。次いで高いのが「地域の行事に参加する(夏祭りなど)」で、以下、「映画館に映画を観に行く」「お墓参りをする」と続いている。一方、1年間を通して「ほとんどしない」割合が高かった活動としては「コンサートやライブに行く」「キャンプに行く」「ボランティア活動に参加する」「美術館や博物館に行く」「スポーツを観に行く」が挙げられる。

表3 1年間の体験活動実施率

(%)

		ほとんどしない	1回	2回	3~4回	5~9回	10回以上
動物園や水族館に行く	小学生	36.6	32.8	17.4	10.4	2.0	0.8
	中1~2生	64.5	23.4	8.0	3.6	0.4	0.2
	中3生	77.0	16.1	5.2	1.5	0.2	0.1
映画館に映画を観に行く	小学生	18.0	24.1	26.7	22.6	6.4	2.2
	中1~2生	20.4	24.4	24.4	22.3	6.6	1.9
	中3生	23.5	22.0	25.4	21.3	6.3	1.5
美術館や博物館に行く	小学生	64.2	21.5	8.3	4.5	1.1	0.4
	中1~2生	75.8	14.9	5.8	2.5	0.7	0.2
	中3生	81.5	12.1	4.4	1.6	0.5	0.1
コンサートやライブに行く	小学生	84.5	9.6	3.4	1.6	0.8	0.2
	中1~2生	84.1	10.1	3.3	1.9	0.2	0.4
	中3生	78.3	12.9	4.7	3.5	0.2	0.5
遊園地やテーマパークに行く	小学生	22.8	36.8	24.0	11.8	3.1	1.5
	中1~2生	42.3	32.0	15.6	7.1	2.1	0.8
	中3生	54.6	28.0	11.0	5.2	1.1	0.2
スポーツを観に行く	小学生	65.0	14.2	7.8	6.4	3.3	3.2
	中1~2生	69.8	13.7	7.5	4.8	2.2	2.0
	中3生	75.6	10.7	5.0	5.7	1.5	1.4
キャンプに行く	小学生	69.5	19.8	6.2	3.1	0.9	0.5
	中1~2生	83.7	12.0	2.4	1.3	0.4	0.2
	中3生	89.4	7.6	2.2	0.6	0.2	0.1
家族で旅行に行く	小学生	19.8	35.3	24.6	14.6	3.4	2.2
	中1~2生	29.1	36.2	21.2	10.2	2.1	1.1
	中3生	40.5	37.6	14.3	6.2	0.8	0.5
ボランティア活動に参加する	小学生	76.9	10.7	7.1	3.1	1.0	1.2
	中1~2生	78.9	10.9	5.0	2.7	1.4	1.0
	中3生	77.2	12.7	5.2	3.5	0.7	0.7
家で季節の行事をする (クリスマス、節分など)	小学生	4.5	11.3	17.8	39.5	19.7	7.3
	中1~2生	8.1	12.9	19.1	37.8	16.7	5.4
	中3生	11.6	14.1	20.5	34.2	14.6	5.0
お墓参りをする	小学生	15.7	26.8	25.6	21.2	6.4	4.3
	中1~2生	17.9	26.7	28.0	20.0	4.7	2.7
	中3生	20.4	28.8	27.2	17.4	3.7	2.6
地域の行事に参加する (夏祭りなど)	小学生	9.6	19.5	25.9	30.0	10.4	4.5
	中1~2生	20.5	25.6	27.6	20.5	4.0	1.9
	中3生	29.3	27.6	24.7	14.5	2.8	1.1

注1 いずれかの設問に無回答・不明の場合は、分析から除外した。

注2 サンプル数は、小学生 2,407名、中1・2生 2,179名、中3生 1,103名。

表4も併せて、少し詳しくみていこう。イベント体験活動は、「映画館に映画を観に行く」「遊園地やテーマパークに行く」は、半数程度以上が1年間に1回以上体験している一方で、「美術館や博物館に行く」「コンサートやライブに行く」は6～8割が体験していない。また「映画館に映画を観に行く」は学校段階や学年差はみられないが、「遊園地やテーマパークに行く」や「動物園や水族館に行く」は学年や学校段階が上がるにつれて体験する割合が減っていく。このように、イベントの種類によって体験のありようが大きく異なっていることがわかる。

家族体験活動では、「家で季節の行事をする」は先にみた通り、学校段階や学年を問わず大半の家庭で体験しているが、「家族で旅行に行く」は学年や学校段階が上がるにつれて体験する割合が減っていく。

地域体験活動では、「地域の行事に参加する」は小学生で9割、中学生でも7～8割が1年に1回以上体験しているが、「ボランティア活動に参加する」は学校段階や学年を問わず、2割程度しか体験していない。

また、多くの項目で、中1・2生から中3生に学年が上がったところで体験する割合が減っている。高校受験

を控えて、余暇的な活動を体験する時間が取りにくくなっていくものと考えられる。

2) 人口規模別にみた活動の体験状況

このような体験活動には居住地域による違いがあるのだろうか。イベント体験活動、家族体験活動、地域体験活動からそれぞれ1項目ずつを例に、小学生に限定して、人口規模別にまとめたのが図10～図12だ。イベント体験活動の例として挙げた「美術館や博物館に行く」も家族体験活動の例の「家族で旅行に行く」も、数ポイントだが、人口規模の大きい地域の方が体験している割合が高い。それに対して、地域体験活動の例の「地域の行事に参加する」は、「なし」の割合では、「特別区・政令指定都市」「15万人以上」「5～15万人未満」の10%程度に対して「5万人未満」で5.5%と5ポイントの差にとどまるが、「3回以上」体験している割合は、「特別区・政令指定都市」「15万人以上」「5～15万人未満」は4割程度にすぎないのに、「5万人未満」では5割強と、人口規模の小さい地域ほど、地域の行事に参加する割合が高くなっている。

表4 1年間の体験活動実施状況の特徴

1) 動物園や水族館に行く	小学生で3分の2、中学生で3分の1が1年間に1回以上体験
2) 映画館に映画を観に行く	学年を問わず、8割前後が1年間に1回以上体験
3) 美術館や博物館に行く	小学生で3分の1、中学生で2割程度が1年間に1回以上体験
4) コンサートやライブに行く	学年を問わず、8割前後が体験無し
5) 遊園地やテーマパークに行く	小学生で8割近く、中学生で半数程度が1年間に1回以上体験
6) スポーツを観に行く	学年差は小さく、3割前後が1年間に1回以上体験
7) キャンプに行く	小学生で3割、中学生で1割台が1年間に1回以上体験
8) 家族で旅行に行く	小学生で8割、中1・2生で7割、中3で6割が1年間に1回以上体験
9) ボランティア活動に参加する	学年を問わず、4分の3が体験無し
10) 家で季節の行事をする(クリスマス、節分など)	学年を問わずほとんど体験しており、1年間に3～4回が3割台
11) お墓参りをする	学年を問わず、8割程度が体験しており、回数の散らばりも大きい
12) 地域の行事に参加する(夏祭りなど)	小学生の半数が1年間に2～4回、中学生の半数が1年間に1～2回体験

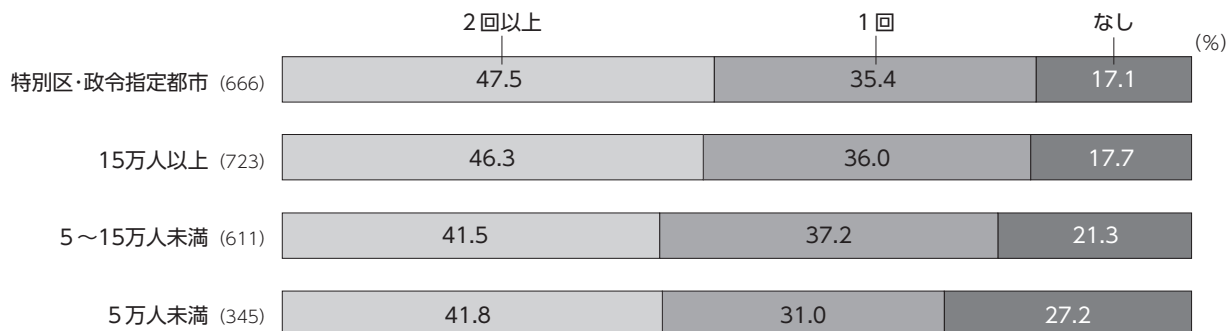
図10 人口規模別にみた「美術館や博物館に行く」回数(小学生)



注1 無回答・不明は分析から除外した。

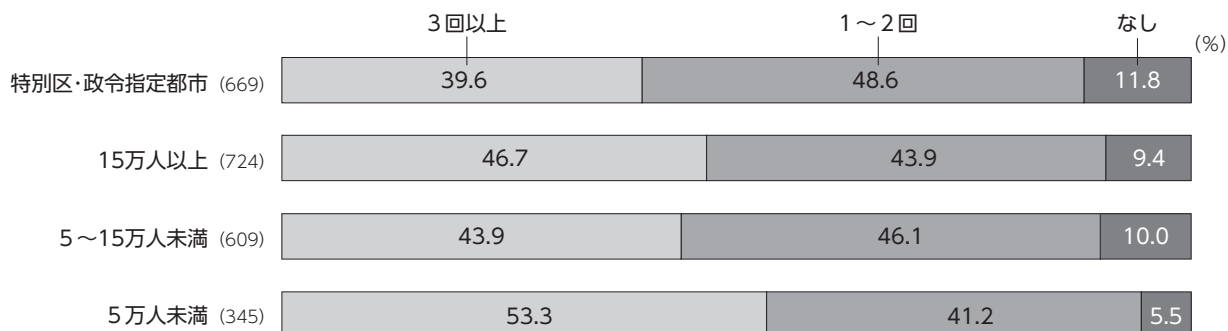
注2 ()内はサンプル数。

図11 人口規模別にみた「家族で旅行に行く」回数（小学生）



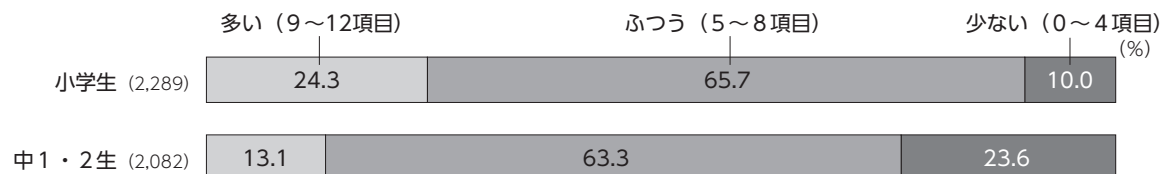
注1 無回答・不明は分析から除外した。
注2 ()内はサンプル数。

図12 人口規模別にみた「地域の行事に参加する」回数（小学生）



注1 無回答・不明は分析から除外した。
注2 ()内はサンプル数。

図13 「1年間行事数」(学校段階別)



注1 無回答・不明は分析から除外した。
注2 ()内はサンプル数。

以上の傾向は他の個々の活動にもおおよそみられ、イベント体験活動と家族体験活動は、人口規模の大きい地域の子もほど体験する割合が高く、地域体験活動は、人口規模の小さい地域の子もほど体験する割合が高いことがわかった。つまり、どのような体験活動をどのくらいの回数するかには、居住地域による違いがみられるということだ。

3) 人口規模別にみた「1年間行事数」

小・中学生はどれだけ多様な種類の活動を体験しているのだろうか。12項目を体験の有無だけに分類し直し

て体験数の総和を求め、0～4項目を「少ない」、5～8項目を「ふつう」、9～12項目を「多い」の3つに分類した。なお、中3生は高校受験の影響で体験数が減ったと考えられるので、分析から除外する。

3分類した「1年間行事数」を小学生と中1・2生に分けてまとめたのが図13である。「多い」は小学生の24.3%から中1・2生の13.1%へと、学校段階が上がると減っていき、逆に「少ない」は小学生の10.0%から中1・2生の23.6%へと増えていく。学校段階が上がるにつれて、体験する活動のバリエーションは少なくなっていくのだ。

では、「1年間行事数」に居住地域による違いはあるのだろうか。小学生については図14に、中1・2生については図15に、人口規模別に分けてまとめた。

小学生では、「少ない」が「特別区・政令指定都市」の8.5%から「5万人未満」の14.4%へと人口規模が小さくなるにつれて増えていき、代わりに「ふつう」が「特別区・政令指定都市」の66.5%から「5万人未満」の62.1%へわずかながら減っていく。「多い」については人口規模の小さい地域ほど1ポイント程度少ないが、目立った差とは言えない。

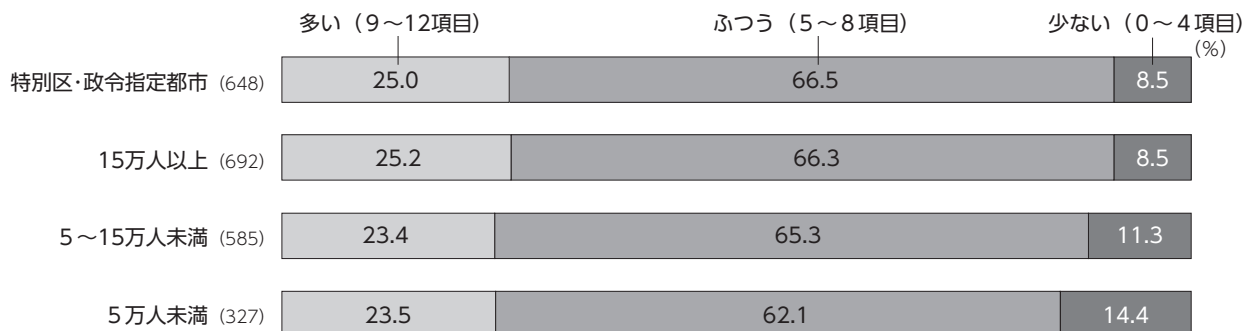
中学生では、「少ない」が「特別区・政令指定都市」の20.1%から「5万人未満」の32.0%へと人口規模が小さくなるにつれて増えていき、代わりに「ふつう」が「特別区・政令指定都市」の65.3%から「5万人未満」の58.2%へ、「多い」も「特別区・政令指定都市」の14.6%から「5万人未満」の9.8%へと減っていく。

地域体験活動は人口規模の小さい地域ほど体験回数が

多くなるものの、そもそもの調査項目にイベント体験活動が多く含まれていることもあって、小学生も中1・2生も、人口規模が小さくなるほど「1年間行事数」の数が少なくなる傾向が読み取れる。人口規模の小さい地域には、一般にイベント体験活動等の施設が少ないこと、施設までの移動時間がかかることなどが影響しているのだろう。つまり、「1年間行事数」で測られるような体験活動の種類の多寡には、居住地域による違いがみられるということだ。

また、小学生について、9種類を超えるほどの多くの活動を体験している場合には居住地域による違いはみられず、数種類の体験をできるかどうかのところで居住地域による違いがみられるということは、背景に、美術館や動物園などが近くにあるかどうかといった地域による違いだけでなく、経済面や子どもの教育に対する関心の持ちようなどの家庭環境もまた体験活動に影響していることがうかがえよう4)。

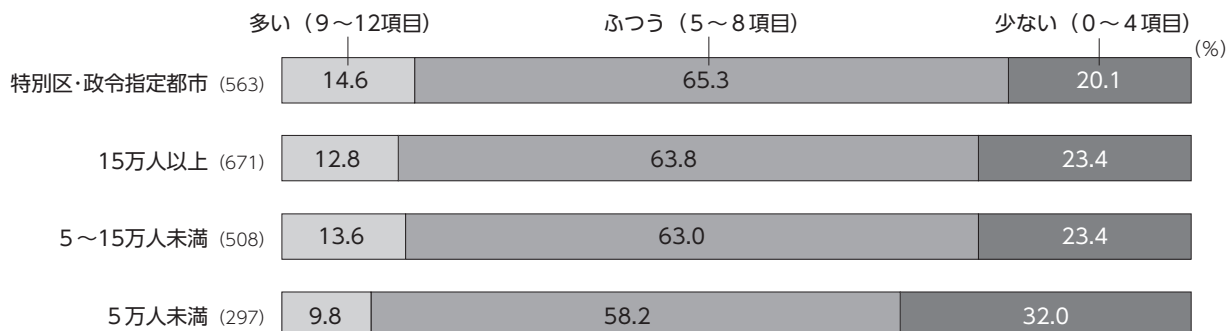
図14 人口規模別にみた「1年間行事数」(小学生)



注1 無回答・不明は分析から除外した。

注2 ()内はサンプル数。

図15 人口規模別にみた「1年間行事数」(中1・2生)



注1 無回答・不明は分析から除外した。

注2 ()内はサンプル数。

第6節 まとめ

本章では、子どもたちが放課後や休日に積み重ねるさまざまな体験活動の違いもまた、将来的に何らかの意味をもつようになっていく「地域格差」となっているのだろうかという素朴な疑問から、現時点では直接その問題に答えられないまでも、「地域によってこのような体験活動の違いがある」ということを明らかにしておこうという目的を設定して、「放課後の過ごし方」の学習の仕方や「かけもちパターン」と、「1年間の過ごし方」の体験活動の量や「1年間行事数」について、人口規模を指標にした居住地域による違いの有無を検討してきた。以上の分析から明らかになった主な知見と今後への示唆を提示して、本章のまとめとしたい。

①知見1：人口規模の小さい地域では学校依存がより高い

学校にいる時間、通学時間、学習の仕方とその構成比、「かけもちパターン」から、人口規模の大きい地域に比べて小さい地域では、学校にいる時間や通学にかかる時間が長いだけでなく、例えば、学校以外の学習の場が限られていたり、中学生では放課後の活動の場を部活動に依存していたりと、小・中学生の毎日の生活そのものが学校中心に構成されている傾向にある様子がうかがえる。

②知見2：人口規模の小さい地域では体験活動の機会がより少ない

外遊び時間、「かけもちパターン」、1年間の体験活動、「1年間行事数」から、人口規模の大きい地域に比べて小さい地域では、平日の放課後や週末、長期休暇に、友だちと遊んだり、学校以外の場でさまざまな活動を体験したりする機会がやや少ない傾向にある様子がうかがえ

る。

これらの知見と、今後の人口減少社会の進展、より体験を重視する傾向が強まると思われる大学入試改革をふまえたとき、今後に向けて、次のような示唆ができるだろう。

I. 少子化と高齢化による人口減少社会に向けて、小・中学校の統廃合は、逆説的に子どもの学校への依存度を高めるのではないか。

小・中学校の統廃合に際して、授業など教育課程内の教育活動の効果だけを考えていればよいわけではないことがわかった。通学や放課後の過ごし方などについても考慮して、対応策を検討していくことが期待される。

II. 学校教育におけるさまざまな体験活動をしっかり行えるようにしていく必要があるのではないか。

その1つの対応策としては、学校行事等の特別活動や部活動などの課外活動をどう充実させていくかということが考えられる。例えば、加入率の高い部活動のあり方を再検討し、より将来の社会につながる活動にしていこう工夫が求められる。

III. 学校の施設をさまざまな体験活動を行う場としてより有効に活用していく必要があるのではないか。

学校でできることは、何もすべて学校教育活動の一環として教師がしなければいけないわけではない。例えば国土交通省が提案している「小さな拠点」⁵⁾づくりなども1つの例になりうるだろうが、学校施設の複合施設化で、他の公共文化施設と場を共有できるようにして、子どもの体験活動と大人の体験活動の連携関係を構築するような教育政策と文化政策を模索していくことが望まれる。

1) 高校生に関しては、「5万人未満」の地域では、その自治体に高校がないなどで、他の地域に通っている生徒が一定数いることが予想されるため、居住地域での様子を明らかにしようとする本章の分析にそぐわないと判断して、分析から外した。
2) 「24時間調査」の「学校ですぐずす」のうち「31学校」を対象としている。
3) 学習塾の時間については、塾に行っている子どもだけでなく、全体平均で算出した。
4) 家庭環境による違いについては「第1回放課後の生活時間調査」の報告書『研究所報 vol.55 放課後の生活時間調査報告書』に掲載した「放課後の過ごし方と1年間の過ごし方からみる『文化の格差』の問題」を参照のこと。
5) 「小さな拠点」については、以下のガイドブックを参照のこと。
<http://www.mlit.go.jp/common/000992103.pdf>